

研究ノート

心理的距離モデルにおける諸概念の構造化と尺度化の可能性

山根 一郎*

Structuring of concepts in the psychological distance model and the possibility of their scaling.

Ichiro YAMANE

1. 問題

他者に対して感じる心理的距離感（以下、心理的距離、距離）を、“生きられた距離”として探究する現象学的視点から出発し（山根, 1987b, 1995, 2005）、表層的な尺度化に向わず、深層の存在論的次元に沈降し、心理的距離の本質は自他間の「存在の間隙」（山根, 2012）と意味づけた。ただし、その間隙は自他二元論的な絶対的断絶という質的性質ではなく、「隔てと結びの両義的性質をもつ」（山根, 2001, 2005）その度合いが伸縮しうる量的性質という、現象学的視点においてこそ見えてきた現象を概念化することができた。そして、その視点を保持したまま、表層レベルに浮上して、心理的距離を心理学的構成概念として位置づけ、そしてそれを可視化するための尺度化を志向することになった（山根, 2016, 2017）。

本稿はこの志向をさらに推進して、心理的距離にかかわる諸概念を構造化し、さらに尺度化の視点に立つことで、構成概念の変数化の道を拓く。それによって心理的距離の体験構造に距離値の変動という動態を加味した統合的仮説モデルを構築するのが目的である。

すなわち、これまでに提出してきた心理的距離にかかわる諸概念の構造的関係と内部構造を明確にする。構造的関係は心理的距離が発生し変化する過程のモデル化に相当する。内部構造とは、尺度化を前提とした“構成概念”として捉えなおし、尺度化の視点から、概念の曖昧さをそぎ落したものである。

2. 概念構造

まずは現象学的視点をベースに構成された心理的距離にまつわる諸概念を、後章でそれらの構造化と尺度化をするために、分類ごとに簡単に説明する。その際、このモデルに属する概念は特に初出時は「」で括る。

2.1. 距離の構成要素

心理的距離という1次元的な志向経験は、現象学的にはノエマ（志向対象）成分である「個別性」と、ノエシス（志向作用）成分である「共同性」の2次元に分割可能であり、その合成

*心理学科 教授

ベクトルである「かえがえのなさ」が、他者への志向現象として本来定義したい心理的距離である。ただし距離を定量化する場合、合成ベクトルのノルムを“距離”の値とするのではなく、そのベクトルの構成要素である共同性次元を、通常の“親密感”として理解されている心理的距離とみなす。すなわち測定を目的とする心理的距離は、共同性の度合いの逆数と操作的に定義する。心理的距離概念が2義的であると心理的距離の尺度化の足枷となるため、尺度性を複雑化させないための暫定的措置である。

2.2 距離の経験場

他者との間の心理的距離を経験する場として、能動（自己→他者）・受動（他者→自己）という2方向と、表象（非対面での想起）・表出（対面での行動）という2種の経験層の組合せにより、心理的距離は「能動表象」「能動表出」「受動表出」「受動表象」の4側面を経験される。同一他者に対して、これらの4側面での距離（共同性）の値は異なりうる。これらの側面間の距離の差として、ズレ（表象と表出の差）、ミゾ（能動と受動の差）、不整合（能動表象と受動表出間の差）がそれぞれ経験される。

表出は行動であることから、その行動が含意する距離を「原表象」とみなすことで、表出も表象と同じ共同性という測度で示すことにより互いの比較（差）が可能となる。

2.1. ノエマ的要素：他者の現れ

心理的距離の発生機序においては、まず他者認知に付随して最初にノエマ的な個別性成分が経験される。その距離対象である他者は、特定の関係性を備えて“現れ”る。その関係性は、以下の3水準（面識性、間柄、仲）で概念化される。

「面識性」はまず面識の有無を基準に「知人」と「他人」に分けられ、さらに知人は心理的距離が近い順に「真知人」と「周辺知人」（心理的距離の遠い知人）、他人は心理的距離が遠い順「真他人」（互いに匿名）に「知他人」（一方的に見知った他人）の計4種の他者に分けられる。知人と他人の違いは心理的距離の遠近だけでなく、出会い時の挨拶などの表出行動への規範的圧力の差を伴う。

「間柄」は“親子”・“友人”などの関係のカテゴリーで、法的・社会的所属のような客観的基準がある公的間柄（親子、同僚など）、当事者間の合意のみで成立する私的間柄（友人、恋人など）に分かれる。同じ当事者間で複数の間柄が重複することもある。それぞれの間柄は社会規範的に一定範囲の心理的距離を含意している。

「仲」は間柄内での共同性の変動幅であるが、仲の変化は間柄（特に私的間柄）を変更させることがある。

心理的距離の範囲を含意した特定の間柄を示す表出行動を「有標行動」（山根、1987a）という。有標行動は、行動とそれが含意する心理的距離すなわち共同性が連合した“記号”である。この記号性が社会に共有されることで、互いの間柄に見合った行動が交換される。明示的な基準のない私的間柄の場合、有標行動の提案とその承認によって、互いに特定の間柄（たとえば恋人）が確認（合意）される。

2.2 ノエシ的要素：生きられた距離

ノエシ的要素である自己側の距離作用を根源的に規定する要因として、他者との心理的距離はより広義な世界（外界）との距離感に規定されると考えると、世界との距離を規定する個

人要因として、安永(1992a)のいうファントム空間(外界との心的距離)の広さを規定する“気質”が考えられる。これは Kretchmer 起源の気質論に安永のファントム空間論を加味したもので、それを非病理的な表現に置換えると内閉性気質(分裂気質)、同調性気質(躁うつ気質)、それに安永の固有な分類名としての中心性気質(てんかん気質、嗜癖など)となる。これらの気質は後述する「自我距離」(距離の原点から自我境界までの距離)が異なり、その距離が遠い順に内閉性>同調性>中心性となる。

表象距離にかかわるものとして、有標行動などの表出に付随した「原表象」をもとに内的に表象が繰り返し経験されると「再帰的表象」となり、これが非対面場面でも経験できる能動表象となる(現前でない他者に対する心理的距離の回答はこの能動表象による)。

また心理的距離経験に付随する感情反応(情態性)として、「かけがえのなさ」は愛という存在承認の感情に相当し(心理的距離≒愛の程度)、また孤独(他者の不在)と自己喪失(他者への隷属・依存)は心理的距離の両端現象としてジレンマ的に構成される。すなわち心理的距離空間は、対人関係の本質的ジレンマ(ヤマアラシのジレンマ)を内包している。さらに、より表層的なジレンマ状態である不整合状態では、距離が能動表象<受動表出事態での「先走り感」あるいは「置き去り感」、能動表象>受動表出事態での「疎まし感」という不整合特有の対人距離感情が経験される。

2.3. 力学的要素

心理的距離を構成するものではないが、その心理的距離を変化させると想定される力を以下に示す。

「構造的力」は4側面間の距離を一致させる方向に働く、均衡状態を指向する力である。すなわちこれら間の不一致であるズレやミズ、不整合は距離のアンバランス感という不快感を与えるため、一致(均衡)する方向に作用する。

「魅力」は一般的な用語であるが、心理的距離モデルにおいても、他者側すなわち個性に備わる距離を接近させる力として強力に作用する。

「間柄力」は、間柄において作用する、間柄にふさわしい距離を実現する力である。初対面の他人同士でも、“同僚”などの間柄の認識があれば、この力が両者に作用して、距離が接近する表出行動がなされる。これに付随して、面識性における規範的圧力も距離を変化させる力であることから、これを「面識力」と名づける。

「共在力」は共に在るという状態そのものが慣性的に作用する力で、単純接触効果と同じく、馴染むことによる認知的受容にもとづく。

「表象力」は共在しなくても、表象すなわち相手のことをただ想うだけで能動表象を接近させる。

以上、個性にかかわる力(魅力)、共同性に関わる力(共在力)、社会規範に由来する力(面識力、間柄力)、均衡維持に働く力(構造的力)、慣性方向に働く力(共在力、表象力)などがある。

3. 心理的距離空間

次に、以上の諸概念が布置される心理的距離空間について整理する。

3.1. 心理的距離の存在論的基礎づけ

まずは心理学レベルの心理的距離モデルを基礎づける、自覚されない深層的レベルの意味を論じる。心理的距離が対人関係の表層的な1変数ではなく、対人関係の本質的現象であることを論じる視点である。

心理的距離空間は、自・他の存在の間隙、ただし固定した断絶ではなく伸縮可能な隙間である。その隙間は、自己と他者を両端とした閉空間であり、「自己と他者の存在論的バッファ（緩衝帯）」（山根, 2012）、「自他の隔絶性と共存性の混交領域」（山根, 2016）、「他者であることの両義性（他なる自己）の空間」（山根, 2017）である。

自己と他者との間にこのような移行空間を見出すことは、自己と他者を、自己である＝他者でないという単純な相補対としてみるのではなく、並立可能な概念対とみなすことである。それによって他者性の度合いである個別性（ただし自己に対立する他者一般の度合い＝異他性ではなく、特定のその人である度合い）と自己性の度合いである共同性という2次元空間（平面）が開かれる。

ただし心理学的測定としては、共同性の1次元（正確には2次元ベクトルから共同性軸に下ろされた値）のみに着目し、その次元では自己性と他者性は距離空間の両端とみなせる。その変動域は、人格性のない人間としての最小限の共同性しかない真他人の最遠域から、自己に同化するほどの真知人の接近限界に至る範囲をもっている。

この定量的変化空間は、閉空間の起点が自己性（共同性）、終点が他者性（個別性）のそれぞれの極値となるため、それらの移行空間という性質をもつ。そのため、他者との出会い当初は個別性の増加が主要な変化となるが、知人化した後は共同性の増加が主となる。その意味でも知人を前提とした心理的距離は、共同性の反映とみなしてよい（ただし、実際には個別性も増大し続けるため、2次元ベクトルである「かけがえのなさ」が増大する。実際の他者は他者性を減少させて自己に接近するのではなく、他者性を増大させながら自己に接近する）。

本論での自己と他者は抽象的な概念対ではなく、自己はこの私であり、他者は特定のあの人である。すなわち、おのれに与えられた自己性は唯一で、他者性は志向される他者の数だけそれぞれ存在する。

心理的距離空間が自他の移行領域であることは、そこが自己性と他者性に引き裂かれるジレンマ空間とみなすこともできる。すなわち、距離の両端は他者が届かない孤絶した状態と、他者によって自己を喪失した状態である。そしてこの空間を開かせている動機が、孤独の回避と自己喪失の回避といえる。ジレンマの解決（調整）は、「ヤマアラシのジレンマ」の逸話がそうであるように、近すぎも遠すぎもない最適な距離を実現することである。その両端に囲まれた「隔てと結び」が交わる領域においてそれは実現可能といえる。本モデルの実用的な目的は、個々の対人関係において最適距離を実現することにある。

3.2. 存在者としての距離空間

次に存在（論）ではなく存在者（事物）としての心理的距離空間の特徴を、数学的な距離概念との照合（山根, 2012）に基づいて概観する。

数学的距離には“非類似度”という意味がある。これは非自己度、すなわち同一でない度合いを意味する。これを心理的距離に当てはめた場合は存在者的な属性の非類似度ではない。たとえば、夫婦は性別も年齢も異っていても、心理的距離が最も近い関係になりうる。心理的距離にかかわるのは存在論的非類似性（山根, 2015）であり、それは共同性の逆数（ $1 / \text{共同性}$ ）

と解釈できる。

数学的距離には“非負性”という性質がある。すなわち距離の可能な最小値は0で、それ以下にはならない。心理的距離の近い側の端が自己なら、距離は自己が原点（0点）となる。したがって距離空間の尺度は比率尺度とみなせる。一方、距離の最大値、すなわち真他人に対する心理的距離は ∞ なのか。また原点が自己なら、自己は心理的距離空間上の点であるのか。これらについては距離空間のスケールの項で問題にする。

数学的距離には、両端のどちらから測っても等しいという“対称性”があるが、心理的距離は自己→他者（能動距離）と他者→自己（受動距離）とは同じでないことが前提となっている。すなわち心理的距離は非対称的である。これは心理的距離の本質的特徴で、ミゾは常に存在する。ただしミゾを低減して距離を対称化する方向に働く力（構造的力）も存在する。

幾何学的な距離には“三角不等式”（三角形の2辺の距離の合計は残り1辺の距離より常に大きい）が成立する。これに対して対人関係の心理的距離においては、他人同士のA→B間の距離は、互いの知人Cを経由した場合のA→C+C→Bの方が近くなるという「仲介効果」が発生する。これは2者間の心理的距離モデルの3者関係への拡張によるものであるため、2者関係に限定する本稿では問題としない。

以上の照合に加えて、心理的距離空間でも視覚的距離感と同様に、空間の拡大・圧縮が想定される。すなわち距離空間の遠方域と近接域とでは、距離の密度が異なるのではないか。この問題は距離空間のスケール（縮尺）の問題である。

3.3. 距離空間のスケールの多重性

心理的距離を尺度化するにあたって、距離の両端部はどのようになっているかの議論がされた（山根，2017）。それを受けてここでは、心理的距離空間を見渡す距離スケール（縮尺）について、距離空間全体を見渡すスケールをマクロ・スケール、原点である自己点近傍を拡大視するミクロ・スケール、そして最も実用的な知人との心理的距離に注目するメソ・スケールの3種類を想定した。

a) マクロ・スケール

自己から最遠の真他人までを一望に見渡す巨視的スケールである。これは面識性（自己～真知人～真他人）レベルに対応する。いいかえれば面識性尺度を構成する場合の心理的距離成分である。またこのスケール上では、他者の最遠域、すなわち真他人への距離が問題となる。まず関係が開かれていない真他人に対しては、間柄も成立しないため、共同性による心理的距離は測定不能となる。そこでは個別性のみによる知覚情報にもとづく認知的な存在感主体の「志向距離」（山根，1998，2005）という距離経験しかできない。志向距離は個別性の逆数に相当する。個別性が開かれているため（身体的）魅力は作用する。では共同性としての距離は不定あるいは無限遠となるのか。他者を同種他個体の人間と見なしていれば、前経験（生得）的に開かれる最小の共同性である「原共同性」（山根，2017）を想定できる。すなわち志向距離が経験される通りすがりの真他人に対しては原共同性が辛うじて作用し、それ以遠の他者はモノと同じ存在となる。

b) ミクロ・スケール

ミクロ・スケールは毎回の表出ごとの距離の変動、あるいは間柄内における仲の水準の変動のような微視的な視点である。

この視点で問題となるのは距離の最近域である原点近傍の領域である。原点である自己は

“点”かという、自己そのものの空間性の問題でもある。安永のファントム空間論での、気質（内閉性、同調性、中心性）によって、原点から自我境界までの距離が異なるという問題とも関連する。心理的距離モデルでは、安永の“定常距離”すなわち自極（主観の起点）から自我境界までの距離を「自我距離」とし、自我境界に原点0からの単位距離1を充てた（山根, 2012）。こうすることで心理的距離尺度を比率尺度とする可能性を開いた。自我境界は他者の接近限界でもあり、そこに達した状態を“同一化”とした。自我距離内の空間である「自我空間」には、通常では他者は侵入できないが、“憑依”という他者現象はこの空間内で起きる。さらに安永（1992b）による統合失調症者の“させられ体験”などの図式化により、距離は非日常的には0以下の負の値にもなりうること（他者の背後化）も示した。

c) メン・スケール

自我境界から真他人の手前までの中間域、すなわち自我距離より遠く、真他人に対する志向距離や原共同性のみ領域より近い、特定の間柄で接する他者（真知人～知他人）の領域に注目する視点である。この領域では共同性が開かれているため、共同性の逆数としての心理的距離の測定が可能となる。またズレ・ミゾ・不整合などの距離の不均衡現象も発生する。さらに実現している距離だけでなく、間柄や魅力によって到達目標化された距離すなわち「投企的距離」（山根, 2002, 2005）が発生しうる。この距離は表出されることなくとも能動表象においてリアルに経験される。

3.4. 距離経験の現象学

以上は概念的に図式化された心理的距離空間であるが、では実際には心理的距離はどのように経験されるのか。それを探った研究（山根, 2015）によれば、まず回答者にとっての真知人と周辺知人に対する能動表象について距離値を、自己を0、アカの他人を14とした15段階の数直線上に回答させ、その様子を観察したところ、回答者7名はいずれも短時間に躊躇無く回答可能した。では、なぜ心理的距離は直感的に回答可能なのか。

引き続き、同じ回答者に距離対象（ノエマ）と距離経験（ノエシス）を分離させ、能動表象時の前者と後者を別個に自由記述させたところ、能動表象を回答する際には、まずは距離対象となる他者の受動表出を表象（想起）し、その表象時に感じる感情や感覚（情感）が距離評定の根拠となったという。ただしその根拠は推論によるのではなく、情感がそのまま距離感とみなされた。

このように、真知人に対してはノエマの想起に付随する情感的反応が距離として直感的に“感じられた”ことから、心理的距離は、推論過程を経たものではなく、情感的反応として直接与えられるとみなせる。今まで説明したモデルと合わせると、この情感の度合いが共同性の反応に相当することになる。一方、遠い周辺知人に対しては、情感的反応がなく、その欠如自体が遠い距離感として解釈された。

ただ、ここで用いた15段階の尺度で、有標行動の評定、さらにはズレ・ミゾなどの距離の微妙な差異を表現できるかは疑問である。

4. 概念の尺度可能性

以上概観してきた心理的距離の諸概念を、距離の測定と変動メカニズムも含めた実証的な心理学モデルとして統合するなら、それらを尺度化可能な構成概念として位置づける必要がある。

すなわちこれらの概念に対して、存在論的視点は背景化させ、測定という最も表層的・具体的な視点でこれらを見直す必要がある。その作業によってこのモデルがどこまで心理学モデルとして実証研究の俎上に載せられるかが見えてくる。

この可視化（定量化）を試みる事で、（構成）概念のより詳細な様態（姿）が見えてくる。ここでは心理的距離にまつわる概念をすべて尺度化するつもりで概念を見直していく。ちなみに、構成概念は下位概念（因子）に分解されることが多いが、尺度は可能なかぎり1次元なものに単純化したい。

4.1. 距離の構成要素

a) 個別性尺度

他者の内実度である個別性は、その他者についての情報量とみなすことができるが、その客観的な量がそのまま心理量になるというより、その情報量が心理的に与えるインパクトである“存在感”の方が心理量としてはより直接的と思える。

他者の情報量は、非対面時でも経験可能な表象的信息量と対面時の表出的情報量に分けられる。表象的信息量は、その他者の他の他者との識別性（顔の同定ができる、名前を知っているなど）が基準で、ここで真他人と知他人以降が分れる。識別以降の個人情報知識として累積される。

表出的情報量は、対面時の情報強度あるいは精細度で、空間的に接近するほどその意味での情報量が高まる。従ってこちらの情報量の方が存在感に直結するが、空間的近接による存在感の増大は真他人（表象的信息量はない）に対する志向距離でも発生する。

存在感は情報量に対する処理負荷感といえる。表出的情報量に付随するものもそのため、知識としての新たな情報である必要もない。存在感を“気になる度合い”とすれば、対面に限定することなく、非対面での表象として思念の対象となり、さらには「いつも心の中に居る」という表象的存在感に導かれる。この状態では共同性による近さも実現されている。

個別性を高めるのは、空間的近接のほかには魅力や個人情報の知識も関係しよう。情報量と存在感が強く相関しているなら、尺度はどちらか一方に絞りたい。個別性が共同性と合成されて「かけがえのなさ」になることから、単なる情報量よりも重要な他者としての存在感、表出的ではなく表象的存在感の方が適している。

b) 共同性尺度

距離の基本尺度とした共同性尺度は、概念的には逆数変換して距離尺度とするが、実際には評価点の逆転化で済むであろう。共同性は自己性であるから、自己である度合い、自己との類似性となるが、上述したように属性的類似性ではない。自己性よりも優先されるべきなのは受容性で、自己（類似）性は受容性の条件にすぎない。存在の受容性こそが「かけがえのなさ」としての愛につながる。

対面での表出的共同性は、受容的対応によって高められ、空間的近接や共行動などによっても高まると思われる。表象的共同性は、「いつも心の中に居る」という状態が心理的に受容している証左となる。表出でも表象でも、暖かい気持になる、ほっとするなどの情感反応を伴うので、これらも指標に入りうる。

c) かけがえの無さの度合い：真の心理的距離

以上の個別性尺度と共同性尺度がともに実現すれば、それらの合成指標である「かけがえのなさ」の度合いも測定できることになる。こちらが真の心理的距離（の逆数）であるなら、合

成指標こそ優先すべきかもしれない。ただし個別性尺度と共同性尺度の合成比率は未知である。たとえば、「かけがえのなさ」尺度を独自に構成して、それにもとづいて個別性尺度と挙動性尺度が対等な比率になるように、これらの尺度を調整することも不可能ではない。

またこれらによって個別性と共同性の間の不均衡、たとえば受容性が低い他者の存在感が大きい状態など、心理的距離の最適性の診断にも使える。

d) 距離の経験構造

能動表象は任意の場面で共同性尺度をそのまま使用する。受動表出は、存在感をありありと感じている対面場面において測定する。表出は能動・受動どちらにおいても有標行動などの表出行動に付随する原表象による共同性尺度を距離値とする。受動表象は、受動表出からの推定値、あるいは個々の受動表出による合成値である。実際にどのように推定されるかは、個人差もありうるので、パターン化が必要である。

これら4つの値から、以下の構造状態の指数を計算できる。もっとも、微妙な差が検出されるほどの共同性尺度の精度が必要である。

ズレ指数 = 能動表象 - 能動表出

ミゾ指数 = 能動表出 - 受動表出

不整合指数 = 能動表象 - 受動表出

4.2. 力の尺度

距離を変動させる諸力も測定すべきである。まずはその力の操作的定義は、心理的距離（共同性）を変化させる原因をいう。力は大きさ（変化量）と方向（接近、疎遠）をもつベクトルである。接近させる力を引力、遠ざける力を斥力と表現できる。また変化に抵抗する力もありうる。力の深層の原因は自己保存の動因で、これによって他者依存、自己防衛や孤独の回避が発生する（山根, 2013）。

魅力はすでに社会心理学の構成概念になっており、既存の尺度を活用したいが、力の強さを測りたいので1次元としたい。

構造的力を作用させるズレ、ミゾ、不整合の算出は上述した。さらにズレやミゾに対する不快感の度合いも測定したい。また不整合については、先走り感などの感情反応の度合いも測定したい。

面識力は本稿で新たに力の1つとして認定したもので、知人に対する表出の圧力、他人に対する表出の抑制力として作用する。

間柄力は、該当する間柄によって表出が期待・許容される距離が異なる。この基準になる距離は「間柄距離」として別個に測定し、この間柄距離と経験している距離との差がある場合に間柄距離側に導く方向に作用する。

共在力は、単純接触効果と同様な作用とすると、この力は当事者には無自覚で、逆に接触頻度や延べ時間などの客観的な指標で測れるかもしれない。ただし、共在時のコミュニケーションや共行動の頻度など、時間以外の要素を取り入れた「共在度」を構成概念とする必要があるかもしれない。

表象力は、非対面時での表象頻度に相関していると思われる。その結果としての表象しやすさや「いつも心の中にいる」度合いも表象力の強さとみなせる。

以上の諸力を込みにした変動因の分析として、一定期間内に心理的距離（共同性尺度）と上の諸力と測定し、距離の変化を目的変数、諸力を説明変数とした重回帰分析によって距離変化

に対するそれぞれの力の寄与が算出できる。

4.3. 個人要因

a) 気質

距離の接近しやすさの個人要因としての気質は、ミクروسケールの問題とともに社会心理学の枠を越えた心理的変数の1つであるため、対人関係の心理的距離モデルには組み込まれていないが、心理的距離を規定している要因としては見過ごせない。

中心性気質を加えた気質判定の質問紙の作成は可能である。ちなみに気質は、どれか1つにあてはめるのではなく、相対量による傾向として判断される。

b) 自我境界までの自我距離

気質が他者への心理的距離に影響するのは、自我距離（自我境界までの距離）が異なるためという。それなら、その自我距離こそが心理的距離の直接の個人要因となる。

自我境界までの距離の測定を必要とするが、自我境界は元来はその堅牢性（脆弱性）が問題とされて、空間性を問題にしたのは安永からである。だが安永のモデルは幾何学的図式であって、距離測定を目標としていないため、そこから尺度化のヒントは得られない。自我距離に相關するものとして、“身体緩衝帯”（Horowitz,1970 広田訳 1974）などの客観化できる空間を測定することは可能である。そうすれば気質タイプで自我距離が異なりうることも、間接的ながら確認できる。

4.4. 尺度化によるモデルの探究

以上の諸概念の尺度化が実現した場合、心理的距離モデルによってどのような研究が可能となるか。簡単に概観してみる。

a) 距離経験・距離変化の機序

まず着手すべきは心理的距離の経験およびその変化の機序を確認することである。距離経験の作動機序を仮説すると、まず先行要因として気質（自我距離）があり、外的条件として他者の面識性と間柄が与えられる。それによって面識力、間柄力が作動する。当初は個別性が開かれて、それによって魅力が作動し、それらに対応した共同性が開かれていく。心理的距離は受動表出（有標性）→受動表象→能動表象→能動表出の順で経験され、それらの間で構造的力が作動し、距離の調整がなされる。さらに関係が続くことで共在力が作動し、非対面での表象力も作動する。非対面場面で熟成された能動表象が次の対面での能動表出に反映される。以上の機序が両当事者においてそれぞれ作用することで、それぞれの心理的距離が相互作用的に変化していく。

b) 心理的距離の不適合状態の診断

上のような一般的な過程を前提として、心理的距離が不適合状態になった場合の診断をする。たとえば、不整合状態で、先走り感や置き去り感を経験している場合、ミゾやズレの不快な程度を確認し、次に受動側が遠すぎるか、能動側が近すぎるのかを判定し、それに応じて、適用できる諸力を選択する。このようにして心理的距離を無理なく調整しながら、最適距離の実現をめざす。心理的距離モデルは、存在論的深みを持ちながら、このように実用的な適用を旨としたい。

引用文献

- Horowitz, M. J., (1970) . Environmental Psychology Proshansky,H.M.et al. Holt Rinehart and Winston,Inc. (ホロヴィッツ, M. J. 広田君美 (訳編) (1974). 個人空間の究明—身体緩衝帯— 「環境組織内の人間的要求」環境心理学 3 巻 誠信書房)
- 山根 一郎 (1987a). 「恋人」という間柄を意味する諸行為の記号学的分析 社会心理学研究 2 (2), 29-34.
- 山根 一郎 (1987b). 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 心理学研究 57 (6), 329-334.
- 山根 一郎 (1995). 対人心理的距離のモデル化 椋山女学園大学研究論集社会科学篇 26, 1-13.
- 山根 一郎 (1998). 対人心理的距離体験における空間性 椋山女学園大学研究論集社会科学篇, 29, 109-120.
- 山根 一郎 (2001). 「他者」概念の心理学的検討 椋山女学園大学研究論集社会科学篇, 32, 233-242.
- 山根 一郎 (2002). 対人心理的距離の存在論的考察 椋山女学園大学研究論集社会科学篇, 33, 127-138.
- 山根 一郎 (2005). 私とあなたの心理的距離—その社会心理学から存在論へ— 青山社.
- 山根 一郎 (2012). 心理的距離はどのような距離か 椋山女学園大学人間関係学研究, 10, 55-65.
- 山根 一郎 (2013). 心理的距離の動態 椋山女学園大学人間関係学研究, 11, 69-80.
- 山根 一郎 (2015). 心理的距離における能動表象—その現象学的接近— 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 46, 87-100.
- 山根 一郎 (2016). 心理的距離の照合モデル 椋山女学園大学人間関係学研究, 14, 1-12.
- 山根 一郎 (2017). 心理的距離尺度の両端—最遠域と最近域の現象学的意味 椋山女学園大学人間関係学研究, 15, 105-116.
- 安永 浩 (1992a). ファントム空間論, 安永浩著作集 Vol.1. 金剛出版
- 安永 浩 (1992b). ファントム空間論の発展, 安永浩著作集 Vol.2. 金剛出版